猫が愛した小説

辻　憲男（文学部教授）

須賀敦子がイタリア語に翻訳した日本文学の中に、谷崎潤一郎の「猫と庄造と二人のおんな」や、井上靖の「猟銃」があった。自身の幼いころ＝1930年代の阪神間がそこに映し出されている、そんな思いがあったのだろうか。

リリーという牝猫を溺愛している庄造が主人公である。庄造の母親は持参金つきの福子を家に入れて、嫁の品子を追い出した。残暑のさなか、品子は福子に手紙を書いた、「御飯の時でも夜寝る時でも、リリーちゃんの方がずっと私より可愛がられていたのです」、でも、福子さんと一緒に暮らすからにはリリーはもう邪魔でしょう、ゆずって下さいな。もし庄造が同意しないようなら、あなたも私も猫以下ということですわね、しかじか。猫への嫉妬心をあおられて、福子はリリーを手放した。じつは品子は老猫を引き取って、それをエサに庄造をおびき寄せようという腹づもりだった。案の定、秋の夕暮、庄造はリリーをひと目見たさに、芦屋の家から自転車に飛び乗って阪神国道を西へひた走る。途中、甲南市場（いま東灘区）でアンパンを買い、六甲登山口の品子の家にたどり着き、草むらにひそんでリリーが出て来るのを待った…。

『細雪』がお嬢さまなら、こちらは面白くて哀しい庶民の男。国道電車に乗る手もあったのに、作者は庄造を自転車で走らせた。“品子もリリーもかわいそうにはちがいない、けれども一番かわいそうなのは自分ではないか”と庄造は思った。

芦屋・業平橋から六甲まで、阪神国道は6キロ余りある。